

ユニークネス剥奪場面における対人魅力の検討： 独自性欲求・親密度・関与度の影響

見 嶽 このみ

ユニークネス剥奪場面における対人魅力の検討： 独自性欲求・親密度・関与度の影響

Interpersonal attraction in the situation of deprivation of uniqueness: The effect of uniqueness, closeness and relevance

見 嶽 このみ

【問題】

ユニークネス理論が最初に提唱されたのは Snyder & Fromkin (1977, 1980) の研究による。Snyder & Fromkin はユニークネス欲求について「人間には本来的にユニークな存在でありたいという欲求が存在することを前提としており、逸脱のように社会的な追放を伴うものではなく、ポジティブなものであり、社会的受容があることが逸脱との違いである」と主張している。我が国においては山岡 (1993) が Snyder & Fromkin の主張に従い、ユニークネス欲求を「自尊感情を高めるようなポジティブな側面における他者との差異の認識に対する欲求」と定義して研究を行っている。岡本 (1985) は、Snyder & Fromkin (1977) の作成した尺度を翻訳し、日本語版の「独自性欲求尺度」を構成した。32項目の質問事項に5件法で答えるもので、高い内的一貫性を得ることに成功している。また岡本 (1991) は独自性欲求を「自己アイデンティティに根ざす欲求であり、人間の社会的欲求の中でも最も基本的なもののひとつである」と考えている。岡本 (1991) では作成した独自性欲求尺度を用いた研究によって、独自性欲求が高まるにつれて「独自性関連属性の獲得を目的とする行動」「自己の属性に

関する主観的な独自性認知の高さ」「さまざまな対人認知概念の中での、独自性概念の相対的重要度」「対人認知概念としての独自性概念の形成度」が高まるということを示している。

独自性欲求尺度の日本語版を発展させた研究の一つとして、宮下 (1991) は独自性欲求を4つの分類に分け、「他者の存在を気にするか否か」「自己を積極的に表出するか否か」という2次元から新しい尺度の構成を試みている。この新しい尺度はユニークさ尺度と名付けられ、近藤・宇野・中川 (2006) はこの尺度を用いた身体装飾についての研究を行っている。

その一方で山岡 (1993) は、岡本の独自性欲求尺度を別の方向でさらに深化させている。山岡 (1993) は独自性欲求尺度の問題点について、項目自体が非同調と他者からの評価懸念の欠如という面が強調されており、最終的な項目選択において「同調圧に屈せず、行動的に自らのユニークさを強調するために社会的非難を受ける危険を犯す」という可能性のある項目が残ってしまったため、Snyder & Fromkin が意図していた「自尊心と関連したポジティブな面での他者との差異への欲求を強く持つ者」という定義との間に、ずれが生じているのであると主張する。そこで山岡

(1993) はユニークネス欲求と本来的に関連する特徴として5つの特徴を挙げてこの尺度の改善を試みた。その5つとは、自己意識、自尊心、リアクタンス、独立的自己顕示性、対人的独立性である。自分自身に注意を向けることがなければ、自他の差異、類似を認識することはできないため、ユニークネス欲求が強い者は自己意識が高い。他者より優れているという認識はポジティブな差異の認識であり、ユニークネス欲求だけではなく、自尊感情を高める。他者とは異なる行動や考え方は独自の価値観に基づいた自立性から生じ、それを脅かされると反発を感じる。独立的で集団の中に自己を埋没させることを嫌うために自己を際立たせる行動をとり、他者に媚びたり従属しようとはしないという特徴であると主張する。また Snyder & Fromkin (1980) は、持ち物や服装、活動、経験など、自らのユニークさを表現することに役立つ社会的に受容された属性をユニークネス関連属性と呼び、ユニークネス欲求が強い者はユニークネス関連属性において自らのユニークさを強調するとしている。以上の特徴を踏まえ、山岡 (1993) は独自性欲求尺度とは別にユニークネス尺度を作成し、信頼性・妥当性を検討したところ、独自性欲求尺度との正の相関が見られたことから独自性欲求尺度と同様にユニークネス欲求による基本的な行動を測定しているが、ポジティブな自己評価を反映した自己概念と強く関連し、「自尊感情を高めるようなポジティブな側面における他者との差異の認識に対する欲求」を測定するものであることができ、結果的に、Snyder & Fromkin の意図に沿う形で尺度を構成することに成功している。この尺度は山岡 (1993) によって対人関係におけるユニークさ、自尊心に基づいた自己顕示性、ユニークネス関連属性、対人的独立性、私的価値観、判断における自律性という6つの因子が抽出されている。

このユニークネス尺度を用いての研究は徐々に進みつつある。柴山と近藤 (2001) は自己像の現実と理想の差異によって生じる自己内葛藤の程度をユニークネス欲求の観点から研究を行い、ユニークネス欲求の高い者ほど自己内葛藤が高いという結果を出した。つまり「他者と合わせなければいけない」という現実と「独自のでありたい」という理想との間の葛藤が、ユニークネス欲求の高い者では有意に現れているということを示したのである。

また山岡 (2009) は個人レベルだけではなく、所属集団と社会を含めた3次元において、集団意思決定の場面での自己抑制が行われるかをユニークネスの視点から研究した。その結果、集団の意思決定に対してユニークネスが高い者は私的受諾の伴わない、納得のいかないまま集団の意思決定を受諾したという結論が得られている。

ここまで記したように、ユニークネス・独自性に関する研究は基礎的な研究から様々な応用的な研究へと広がりつつある。しかし、人と人が関わりあう社会生活を営む上で重要な意味を持つ他者認知という概念に関していえば研究はそれほど進んでいるとはいえない。岡本 (1991) は独自性と他者認知の関わりについて、独自性欲求の高い個人では、独自性概念が対人認知の形成に寄与する程度が相対的に高いことが示されたとしている。つまり、ユニークネス欲求の高い者ほど他者を見るときに独自性が高いかどうかを重要視するというのだ。この研究からもいえるようにユニークネス欲求は何らかの形で対人場面における他者への認知に影響を及ぼしている可能性は高い。

ところで対人場面において、他者との比較を行う際に自己評価を維持するためのシステムの一つに、自己評価維持モデル (Self-Evaluation Maintenance モデル：以下 SEM モデル) がある。このシステムは Tesser & Campbell (1982) が理論として提唱したものであ

る。越（1987）によるとSEMモデルは他者との比較あるいは他者の栄光に浴することによって、自己評価を維持・高揚させる機制について述べたモデルとされている。具体的には他者と自己との心理的近さ（親密さ）、ある課題での他者と自己のパフォーマンス（課題の遂行）、課題と自己定義との関連性（自己関与度）の3つの要素から自尊感情と他者への好意度を予測するというものである。例えば自己関与性の高い場面では親しい者が遂行した課題が成功を収めた場合、自己にとって脅威となりうるといえる。

北村（1998）はこのSEMモデルについての研究を行っている。この研究では他者への評価のうちポジティブなものは自分にも当てはまりがよく、その当てはまりの良いポジティブな評価は親密度の低い人より、親密度の高い友人に対してよく用いられるということがわかった。また自尊感情に関しても研究を行っており、自尊感情が低い群では他の群に比べて刺激人物への評価に対して短所を多く用いることが示された。山岡（1993）の研究によると、ユニークネス欲求は自尊尺度と強い正の相関を持っていることが示されており、これが正しいとするならば、ユニークネス欲求低群は短所というネガティブな評価を多く用いることがあると予測される。しかし北村（1998）の研究自体はあくまで自尊感情と長所・短所という側面からの関わりを調べたもので、ユニークネスを要因として扱っていないので、この研究からユニークネス欲求の低群が対人場面、特にユニークネスが剥奪されるような場面でネガティブな評価を行うと結論づけることはできないだろう。

山岡（1989）も直接的ではないがSEMモデルと関わるような研究として3種類の属性においてユニークネス剥奪フィードバックを行い、その結果ネガティブな情動が発生するかどうかをみている。3種類の属性の1つは中心属性と呼ばれ、「打ち込んでいる活動」

「最も得意とすること」「他人から評価されて嬉しく思う面」といった、個人の自己概念において中心的な位置をしめる属性。2つ目は「最も好きな料理」「最も好きな色」「最も住みたい街」といった、比較的自己評価とはかわりの薄い周辺属性。3つ目は従来のユニークネス研究でも用いられてきた被験者の全体的なパーソナリティ傾向に関する属性である。この結果、中心属性へのユニークネス剥奪フィードバックは周辺属性へのフィードバックに比べてネガティブな情動が発生することを示した。また中心属性においてユニークネス剥奪フィードバックを行なった場合、非同調反応に有意差がみられ、この研究で行なわれた試行のうち前半に行なったものにはユニークネス高群が有意に非同調反応を起こしていた。さらに、ユニークネス欲求の高群と低群では剥奪フィードバックをされた後に弱い主効果ではあるが、高群の方がネガティブな情動を起こしているという結果も見られた。山岡（1989）の研究はSEMモデルに直接照らし合わせた研究ではないため、他者認知場面においてユニークネス欲求がSEMモデルに当てはめることが可能なのかどうかはこの研究からは捉えることができないが、SEMモデルでいう自己関与度を考慮した研究であるといえる。しかしながらこの研究では、SEMモデルでの重要な要因である「心理的近さ」の要因を考慮していない。ネガティブな情動反応の測定で用いた字数測定法の結果が不明確で、その測定法が疑問視されている。また非同調反応以外では有意傾向程度の反応しか見られなかったなどの問題点も指摘されている。これらの問題点を改善することで他者認知場面におけるユニークネス欲求のシステムについての新たな視座が与えられるだろう。

以上を踏まえて、本研究の目的はユニークネスが剥奪される場面における対人魅力の変化について、ユニークネス欲求、親密度、自

己関与度の3つの要因の影響を調査することである。その際 SEM モデルを援用した仮説を用いて検討を行う。本研究の仮説は以下のとおりに考えられる。

仮説1：自己関与度の高い話題で剥奪された場合、その親密度が低い場合はその人に対する評価が剥奪前と変わらないが、親密度が高い場合はその人に対する他者評価が低くなるだろう。自己関与度の低い話題で剥奪された場合、その親密度に関わらず剥奪後の他者評価が高くなるだろう。

仮説2：ユニークネス欲求が高い群は低い群に比べてその下がり幅が大きくなるだろう。特にユニークネス欲求高群は自己関与度の高い話題に関して、より相手に対する評価を低く認知するだろう。

仮説1については、SEMモデルの比較過程の考え方を援用している。自己関与度の高い話題が自分にとってユニークなもので、それが自尊心の高揚につながっている場合、ユニークネスの剥奪という行為を受けた時にその自尊心を維持するためにSEMモデルが機能するはずである。自己関与度の高い事柄に関しては他者との比較過程が生じやすいとされているため、その結果として心理的距離が広がるものと考えられる。特に元から心理的距離の近い者として設定される親密度の高い群ではその他者への評価がより下がるだろう。また、自己関与度の低条件に関しては、態度の類似性により好意が高まることが予測される (Byrne & Nelson, 1965)。SEMモデルでは、自己関与度の低い事柄の場合は反映過程が生じやすいとされ、相手のパフォーマンスが高い場合、心理的距離を縮めると言われているが、ユニークネス剥奪が相手のパフォーマンスが高いと認知されるよりは、Byrne & Nelson (1965) が提唱する態度の類似がより作用しやすいと考えられる。その結果類似が認知された相手に対しては魅力が上がり予測できるだろう。

仮説2は岡本 (1991) の研究から独自性の高い者はより他者の独自性に注目するということ、また山岡 (1989) の研究からユニークネス欲求高群の方がよりネガティブな情動を引き起こしたこと、中心属性でユニークネス欲求高群が非同調反応を示したことを考え合わせると、ユニークネス剥奪後の相手の評価に関しては高群の方がよりネガティブに認知するといえる。自己関与度についても山岡 (1989) の研究結果を鑑み中心属性、本研究で言う自己関与度の高い事柄の方が自分のユニークネスを高く保持し続けるために相手との心理的距離をより離すと考えられる。それぞれの仮説による反応の現れ方を図1に示す。

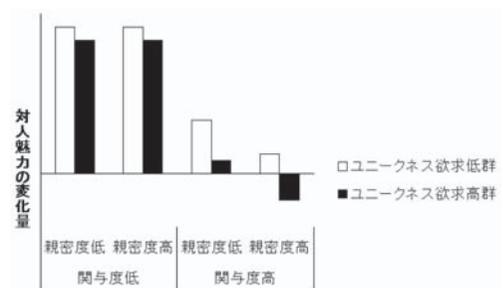


図1 3要因の交互作用予測

心理的距離に関して、本研究では対人魅力をその指標として設定する。本研究では他者との関わりの中で生起する評価システムについて研究を行うものであるが、特に注目されるべきは情動面である。心理的距離は相手への好意の高さであると本研究では考える。対人魅力を用いるのはこういった情動面が測定できると考えられるからである。本研究では出口・吉田 (2004) で用いられた17項目からなる対人魅力尺度では3つの因子が抽出され、その内の一つが“親密因子”と名付けられている。魅力を測定する対象であるAさんに対して「親しみを感じる」「会って話したい」など、相手との心理的な距離を測定するのに適していると思われる項目が見られるため、本研究でもこの対人魅力尺度を採用する。

また本研究では山岡（1993）のユニークネス欲求尺度を全体として用いることで独自性を測定するものとする。

【方法】

1. 参加者

本研究は質問紙調査によって行われた。対象者は北星学園大学1～4年生244名で、有効回答数は201名であった（男性89名、女性112名）。平均年齢は18.83歳（男性18.96歳、女性18.73歳）、標準偏差は0.86（男性0.92、女性0.81）であった。調査は講義中に質問紙を配布して行った。調査日は2012年7月17日・18日の2日間であった。

2. 質問紙の構成

①表紙

調査の目的と、調査日、被験者の所属学科、学年、年齢、性別を回答する欄を設け、記入させた。

②ユニークネス欲求の測定

山岡（1993）が作成した24項目からなるユニークネス尺度を用いて測定した。逆転項目は項目9のみである。1；全く当てはまらない、2；あまり当てはまらない、3；どちらともいえない、4；やや当てはまる、5；全く当てはまる、の5件法で評定させた。

③ユニークさの測定

山岡（1989）でそれぞれの属性の根拠として挙げられた事柄の6項目と、あなた自身の性格、もっているクセ、褒められた経験の計9項目について、1；全くユニークではない、2；あまりユニークではない、3；どちらともいえない、4；ややユニークである、5；非常にユニークである、の5項目を1～5とした5件法で測定した。山岡（1989）は「打ち込んでいる活動」「最も得意とすること」「他人から評価されて嬉しく思う面」を個人の自己概念において中心的な位置をしめる中心属性、「最も好きな料理」「最も好きな色」

「最も住みたい街」を比較的自己評価とはかわりの薄い周辺属性としていた。本研究では山岡（1989）で中心属性としていた3項目と褒められた経験についての計4項目を自己関与度の高い項目、周辺属性としていた3項目に加えあなた自身の性格、もっているクセの5項目を自己関与度の低い項目として取り扱うことにする。

④自己関与度（重要さ）の測定

上記のユニークさの測定と同じ9項目について「あなたにとってどの程度重要ですか」と質問し、それに対して、1；全く重要ではない、2；あまり重要ではない、3；どちらともいえない、4；やや重要である、5；非常に重要である、の5項目を1～5とした5件法で測定した。自己関与度の高低はそれぞれユニークさの測定と対応する。

⑤自己紹介場面における人物の印象評定

仮説の検討のために、自己関与度の高低・親密度の高低で4つの条件を用意した。色々な親密度の人がいる場面として、合同コンパでの自己紹介場面を想定させた。本研究における自己関与度の高低については山岡（1989）の研究から「他人から評価されてうれしく思うこと」という項目を採用することとし、表現をより平易に「褒められた経験」という形にした。また低条件では山岡（1989）の研究から同様に「住みたい街」を採用した。また親密度については「同じグループ」と「違うグループ」のメンバーという2水準を設定した。

教示文は場面の前半と後半に分かれていた。場面前半は所属するグループと他のグループのメンバーで合同コンパしている場面を想定させ、会場でどちらかのグループのメンバーであるAさんから話しかけられる場面を想定させた。この時点における対人魅力を測定した後、場面後半の教示として、褒められた経験か住みたい街を紹介した時にAさんからユニークネスを剥奪されることを想定させた。

⑥事後のユニークネス評定

場面において自分の紹介した事柄がどれだけユニークに感じるかについて1；全くユニークではない～5；非常にユニークである、の5項目を1～5とした5件法で測定した。最後に今回の場面で用いるような合同コンパの参加経験に回答させた。

各条件の教示文と魅力尺度得点について

Aさんの印象を測定するために本研究では出口・吉田（2004）の対人魅力尺度の親密因子から5項目を用いて測定を行った。用いた項目は「Aさんと気が合いそうである。」「Aさんに親しみを感じる。」「Aさんと会って話をしたい。」「Aさんは正直で信頼できる。」「Aさんは一緒にいると楽しい。」の5つであった。出口・吉田（2004）で用いられた親密因子の中で因子負荷量の多かった5項目である。「1. 全くそう思わない」から「7. 非常にそう思う」まで7件法で評定させた。場面の前半と後半で同じ項目を用いて測定した。

教示文は基本的に以下ようになっていた。

場面前半：あなたは、合同コンパに参加しています。参加者は、あなたが所属するグループ（サークルやアルバイト）のメンバーと他のグループ（サークルやアルバイト）のメンバーが半々くらいです。

会場であなたの隣に座った人はあなたが所属するメンバーの一人で、同性・同学年で顔と名前は知っている程度のAさんでした。

Aさんはあなたを見て話しかけてきました。

場面後半：しばらくしてコンパの途中で参加者の自己紹介をすることになりました。あなたは自己紹介の中で、自分のとっておきの話をしました。それは、以前に自分の仕事や活動で褒められた経験で、この参加者の中では誰もできる人・やったことのある人はいないユニークな経験だと思っています。

ところが、話を聞いていたAさんが「私も同じ経験で褒められたことがあるよ」と言い

ました。

なお、上記の教示文は親密度高・自己関与度高の条件のものであり、条件によっては下線部を「違うグループのAさん」、「住みたい街の紹介」と教示した。

【結果】

本研究ではユニークネスの剥奪が操作として行われるが、そもそも想定した事柄がユニークだと思えなければ効果が正確に把握できたとはいえない。そこで本研究ではユニークさの測定において各条件に該当する特徴を「1；全くユニークではない」と判定した被験者は分析対象とはしないこととした。これ以降の研究では、事柄のユニークさについて2点以上をつけた参加者を対象とする。

1. 操作チェック

設定した場面が目的通りに認識されていたかどうかを測定するために、各条件で紹介した事柄のユニークさと重要さを従属変数とした1要因2水準の被験者内要因分散分析を行った。

ユニークさの検定では、住みたい街のユニークさ（3.03）と褒められた経験（3.00）の間に有意な差は見られなかった（ $F(1, 180) = 0.15, n.s.$ ）。重要さの検定では、5%水準で有意な差が見られた（ $F(1, 180) = 4.13, p < .05$ ）。褒められた経験の重要さ（3.33）の方が住みたい街の重要さ（3.15）より有意に平均値が高かった。

2. 親密度・自己関与度・ユニークネス欲求が魅力評定に及ぼす影響

先述の通り、条件に対応する事柄のユニークさについて2点以上をつけた群を対象とし、ユニークネス欲求に関しては総合計点を平均値で2分したものを高群・低群として、以降の分析はこの値を用いて行われた。平均値は77.55で高群は87名、低群は94名であった。なお従属変数である対人魅力尺度5項目の変

化量は後半場面から前半場面の得点を減じたものを用いた。

仮説を検討するため、親密度・自己関与度・ユニークネス欲求を独立変数、対人魅力尺度の5項目の前半場面と後半場面での変化量を従属変数とする3要因の分散分析を行った(表1・表2)。その結果、自己関与度の主効果が1%水準で有意であった($F(1, 173) = 21.12, p < .01$)。自己関与度高条件(0.88)が低条件(4.30)より有意に平均値が低かった。親密度の主効果が5%水準で有意であった($F(1, 173) = 3.83, p < .05$)。親密度高条件(1.95)の方が親密度低条件(3.20)より有意に平均値が低かった。

3要因の交互作用が10%水準で有意傾向であった($F(1, 173) = 3.27, p < .10$)。単純主効果の検定を行った結果親密度高条件かつユニークネス欲求高群において自己関与度高条件(0.31)の方が自己関与度低条件(3.21)より平均値が低い傾向にあった。親密度高条件かつユニークネス欲求低群において自己関与度高条件(-0.78)の方が自己関与度低条

件(4.43)より有意に平均値が低かった。親密度低条件かつユニークネス欲求高群において自己関与度高条件(0.67)の方が自己関与度低条件(4.78)より有意に平均値が低かった。自己関与度高条件かつユニークネス欲求低群において親密度高条件(-0.78)の方が親密度低条件(3.14)より有意に平均値が低かった。自己関与度高条件かつ親密度低条件においてユニークネス高群(0.67)の方がユニークネス低群(3.14)より平均値が低い傾向にあった(図2)。

3. 剥奪後のユニークさの変化

ユニークネス剥奪の操作の前後で自分の想定した事柄のユニークさがどのように変化したかについて検討するため、自己関与度の条件ごとに剥奪操作の前後のユニークさを従属変数とする1要因2水準の被験者内分散分析を行った。その結果、自己関与度高条件では有意な差が見られなかった($F(1, 89) = 0.00, n.s.$)。自己関与度低条件では5%水準で有意な差が見られた($F(1, 90) = 3.90, p < .05$)。剥奪操作前のユニークさ(3.09)の

表1 ユニークネス欲求尺度高低による分散分析の平均値とSD

ユニークネス高群				ユニークネス低群			
自己関与度高		自己関与度低		自己関与度高		自己関与度低	
親密度高	親密度低	親密度高	親密度低	親密度高	親密度低	親密度高	親密度低
0.31	0.67	3.21	4.78	-0.78	3.14	4.43	4.29
(4.40)	(6.14)	(3.68)	(3.27)	(4.71)	(5.50)	(5.20)	(4.16)

()内はSD

表2 ユニークネス欲求尺度総合計点による分散分析のF値

自己関与度	21.12 **
親密度	3.83 *
ユニークネス欲求	0.53
自己関与度×親密度	0.95
自己関与度×ユニークネス欲求	0.05
親密度×ユニークネス欲求	0.40
自己関与度×親密度×ユニークネス欲求	3.27 †

† $p < .10$ * $p < .05$ ** $p < .01$

方が剥奪操作後のユニークさ (3.33) より有意に平均値が低かった。

【考察】

1. 仮説の検討

まず仮説1に関してだが、支持されたと結論づけるには自己関与度と親密度の交互作用が現れている必要があったが、本研究では有意な交互作用は見られなかった。しかし自己関与度と親密度の主効果は見られており、自己関与度に関しては低い方が相手に対する魅力が高くなり、親密度は高い方が相手に対する魅力がより低くなっていた。ユニークネス剥奪の場面において自己関与度が高い事柄かどうかという点は重要であるといえる。仮説の時点では親密度による差は自己関与度高群にのみ現れることを想定していたため明確に仮説が支持されたとは言えないが、親密度が高い方がより相手に対する魅力が低まるという方向性は仮説とは一致するため、仮説1は一部支持されたといえるだろう。

仮説2に関しても一部のみ支持された。仮説2では自己関与度高低条件では差は見られ

ないが高条件においてユニークネス欲求高群の方がより相手に対する魅力が低まるだろうと予測していた。3要因の交互作用において、自己関与度が高く、親密度が低い群でユニークネス欲求の高群の方がより相手の魅力を低く認知する傾向が見られたという点に関しては仮説2を支持するものである。しかし、自己関与度も親密度も高い群になると、ユニークネス欲求の違いによる差は見られなかった。このことから仮説2の全てを支持されたということではできない。自己関与度と親密度が高い条件でユニークネス欲求による差が見られなかったことに関しては、ユニークネス欲求尺度の中に「他人からの忠告をあまり重視しない」だったり「自分と関係のない人にはあまり興味がない」というような項目が含まれるが、低群はこれらの項目があまり高く評定されないためにSEMモデルの影響を受けて魅力が下がってしまったからではないだろうか。逆に高群に関しては山岡(1993)も主張しているように対人面で他者とあまり干渉しないという独立性が高くなる。ユニークネス欲求高群が自己関与度高条件で親密度による差が見られなかったのは、こういった対人的

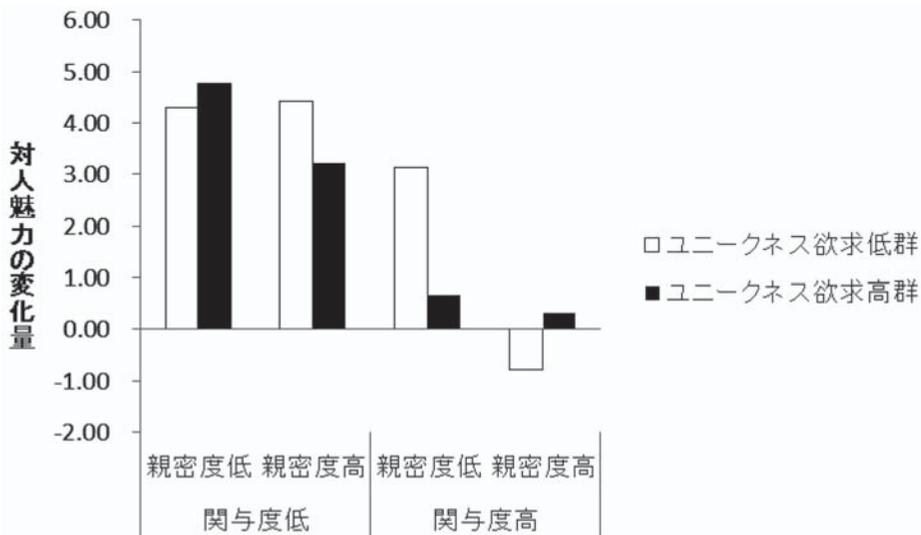


図2 3要因分散分析の結果

な独立性があるために「自分は自分、人は人」という対人認知の仕方になっているのではないだろうか。ユニークネス欲求高群はそもそも親密度がどうであれ相手のことを重視しなかったり、相手への興味が薄いために、高群にとっては「自らのユニークネスを剥奪された」という事実のみが相手を評価する際の重要なベースとなるのではないだろうか。事実、自己関与度が高い群で、ユニークネス欲求高群の間に親密度での差は見られなかった。また今回の分析では自己関与度高群・親密度高群において、ユニークネス欲求低群はマイナス、高群はプラスの値となっているが有意差は見られなかったことから、本研究ではユニークネス欲求低群は意味があるほどのマイナスではないと捉えることとする。

親密度による変化が見られたのは親密度の主効果を除けば自己関与度高条件かつユニークネス欲求低群の場合のみである。特に自己関与度低条件で親密度による差が見られなかったことは仮説1と対応する。こちらは仮説1を一部支持するための根拠となるだろう。

3要因の分散分析が明確に有意な差とはならず有意傾向となってしまったことに関しては、ユニークネス欲求尺度の項目の中には物や流行に関する記述も多く見られるもので、今回のような対人場面における相手の魅力得点への反応としては弱くなってしまったのではないだろうか。本研究ではユニークネス欲求尺度に含まれる項目のうち、対人関係における自己のあり方や自己概念に関わる項目が反応したものと考えられる。

また剥奪前後のユニークさに関しては自己関与度低条件の場合、剥奪後のユニークさの方が高く現れていた。このことは自己関与度が高い事柄ではユニークさは変化しないが、低い事柄だとよりユニークさが強化されたことを示している。岡本（1982）によると、強化的な作用をする類似性は自己にとって永続的とは認知されにくい属性における類似性で

あるとしている。本研究では自己関与度低条件では住みたい街についてのユニークさについて取り扱っている。このような属性は永続的な性質に関することではないと判断されたため、強化的な働きをする類似性として作用したのではないかと考えられる。

以上のことを総合して考えると、ユニークネスが剥奪される場面において他者を評価するときにはSEMモデルがその予測の方法としては一部有効であり、ユニークネス欲求が低い人は高い人に比べて有効にモデルが作動する。しかし、ユニークネス欲求が高い人は元々の親密度よりも剥奪されたという事実が重要であり、どれだけ親密度があっても自己関与度が高い話題でユニークさを剥奪されたらあまり魅力を上げることはないといえる。

2. 問題点と今後の展望

本研究の問題点は質問紙で調査するにはかなり限定的な場面設定になってしまったことである。また、今回は教示文にて提示される話題を山岡（1989）を参考に選んだ。操作チェックの結果、自分にとっての重要性に関しては有意な差があったが、ユニークさは事柄ごとに差は見られなかった。このことは本研究の目的に沿う妥当なものであったといえるが、生態学的妥当性を考慮するならば一般的に違和感無くありうる場面と話題の設定であれば被験者にもイメージしやすく、より鮮明に反応が見られたかもしれない。

また今回は質問紙の都合上対人魅力尺度のうち5項目を評価の指標としたが、本来この尺度は親密・交流・承認という3つの因子を持つ尺度である。そのため全ての項目を用いた場合反応に違いが見られた可能性がある。今後は従属変数となる心理的距離を測る指標の見直しも必要だろう。

なお、今回分析の対象としたのは事柄のユニークさについて2点以上をつけた群であった。事柄について最低でも「全くユニークではない」と言い切った人は除外するという方

法で調査対象者を選別した点に関しては操作チェックが正しく行われたといえる。ただ2点をつけた人も「あまりユニークではない」と評価した人であるため、今後は調査対象者を増やし、ユニークさについて少なくとも3点以上で評価する人を選別することでさらに正確なデータが得られるだろう。

分析については山岡（1993）の尺度をそのまま合算する形で分析を行ったが、尺度を因子分析し対人場面に関わるユニークさに関する因子と対人場面とは特に関わりがないことに関する因子で分けることでより鮮明な結果が見られた可能性がある。

本研究により、ユニークネス剥奪場面における対人魅力の違いについて、SEMモデルが影響することがはっきりしたといえる。今後は質問紙だけではなく、実験的に検証していく必要があるだろう。対人認知に関わる研究は質問紙調査のみで行うと不自然な設定になってしまったり、被験者によって様々な捉え方をされてしまう可能性がある。実験的に場面を統制することで、被験者としても迷い無く感じたままを回答できるし、より現実的な場面を測定することが可能だろう。同じ質問紙調査にしても、ただ文章を読んで想定してもらいよりもビデオや写真などの映像を用いて評定させた方がより正確に捉えられる。今後はこういった測定する上での工夫が必要となってくるだろう。

【謝辞】

本論文の執筆にあたり、多くのご意見とご指導頂いた北星学園大学社会福祉学部・栗林克匡先生、講義時間を通して本研究の調査にご協力頂いた教員、ならびに受講生の皆様に深く感謝致します。

【引用文献】

Byrne, D., & Nelson, D. (1965). Attraction as a linear function of proportion of positive

reinforcements. *Journal of Personality and Social Psychology*, 1, 659-663.

出口拓彦・吉田俊和 (2004). 自己開示の内面性が対人魅力に及ぼす影響—被開示者における対人的志向性の効果に関する縦断的研究— *対人社会心理学研究*, 4, 51-56.

北村英哉 (1998). 自己の長所、短所は他者認知によく用いられるか *教育心理学研究*, 46, 403-412.

宮下一博 (1991). 大学生の独自性欲求の類型化に関する研究 *教育心理学研究*, 39, 214-218.

小川一夫 (1987). *社会心理学用語辞典* 越良子 (編) 自己評価維持モデル 北大路書房 pp.112-113.

岡本浩一 (1982). “独自性理論”における類似性に関して *心理学評論*, 25, 2, 165-177.

岡本浩一 (1985). 独自性欲求の個人差測定に関する基礎的研究 *心理学研究*, 56, 160-166.

岡本浩一 (1991). ユニークさの社会心理学—認知形成的アプローチと独自性欲求テスト 川島書店.

柴山直・近藤佳代 (2001). 青年期におけるユニークネス欲求と自己内葛藤との関連 *新潟大学教育人間科学部紀要*, 4, 31-41.

Snyder, C.R. & Fromkin, H.L. (1977). Abnormality as a positive characteristic: the development and validation of a scale measuring need for uniqueness. *Journal of Abnormal Psychology*, 86, 5, 518-527.

Snyder, C.R. & Fromkin, H.L. (1980). *Uniqueness The Human pursuit of Difference*, Plenum.

Tesser, A. & Campbell, J. (1982). Self-evaluation maintenance and the perception of friends and strangers *Journal of Personality*, 50, 3, 261-279.

山岡重行 (1989). 3種類のユニークネス剥奪フィードバックがユニークネス追求行動に及ぼす効果 *実験社会心理学研究*, 29, 13-25.

山岡重行 (1993). ユニークネス尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 *社会心理学研究*, 9, 181-194.

山岡重行 (2009). 3次元自己制御とユニークネス欲求 *立教大学心理学科研究年報*, 51, 89-101.